

# 郷土室だより

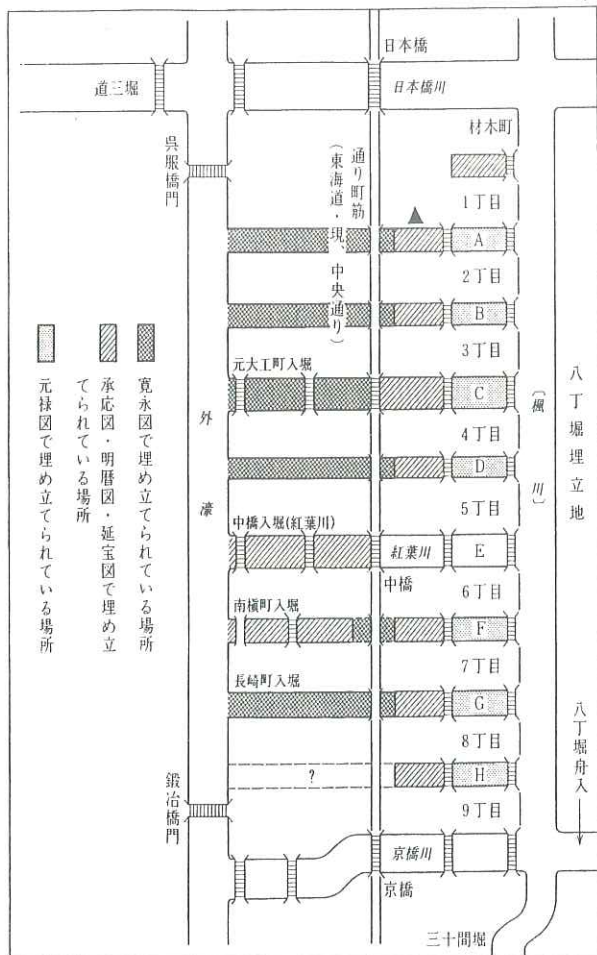
## 「続」中央区の「橋」 (その12)

### ◇横断運河十一本

前号では江戸前島の尾根の部分を南北に掘られた外濠川と、それに直交する形で東西方向に掘られた紅葉川に架けられた中橋を中心に話を進めました。この号では紅葉川に平行して掘られた多くの川と、その意味について述べることにします。

しかし、このような事は、文章よりも図で説明したほうが読者に正確に伝わると考えますので、再び前号の「寛永江戸図」をモトに話を続けようと思ったのですが、原図の状態が余り良くないことと、文字が読みにくい事などが気になりましたので、改めて「寛永江戸図」を書き直したのが、この号の表紙の「江戸前島の舟入堀」図です。

図に見るように楓川（かえでがわ）と外濠間に、十一本もの舟入堀があったと



舟入堀の模式図（寛永図以後元禄図より作成）

は、信じられない人も多いと思います。それは当然のことで毎度繰り返すように、現存する「水面」は日本橋川だけだからです。

中橋を始め京橋川や京橋という地名は、昭和二十二（一九四七）年三月十五日に日本橋区と京橋区が合併して今の中央区ができたこともあって、かつては中央区内に京橋区という区名があったことを始め、急速な

埋め立てによって川が姿を消していった結果、年々「川のある風景」を示す地名である「橋」や「川」・「堀」という名は人々の記憶から遠ざかってしまいました。

現在では数少なくなった「京橋」の名残は、中央通りに面した京橋一丁目と築地一丁目にある京橋図書館位のものになっているのがその一例です。

▲印が日本橋二丁目遺跡

## ◇日本橋二丁目遺跡

図のAの舟入堀の西側に続いていた堀跡（▲印）現在の日本橋二丁目七の一带）は、近世の都市遺跡の確認作業として、中央区教育委員会が調査団を組織して平成十一年秋から十二年三月にかけて発掘調査が行われた場所です。

調査現場が狭いために掘り出した土を付近のビルの三階ほどに積み上げながらの、地味な作業でした。そして慶長十七（一六一二）年に掘られた堀という事も確認されました。

ちようどこの調査と同じ頃、秩父の小鹿坂遺跡から五十年前の原人の生活遺跡が発見されたというニュースが報道されて、連日大きく取り上げられていた時期でした。そのお蔭で見学者が押し掛けて「秩父ブーム」が起きて地元は大喜びしている有様まで伝えられました。それが捏造だと言う事が分かり、関係者も地元も今は後始末に追われています。

その一方の日本橋二丁目遺跡ではビルの隙間の地味な作業で「事実」を積み上げてくれたことが、

深く印象に残っています。

## ◇舟入堀計画

それはさておき、図の日本橋川から京橋川の間はずかー・四キロの海岸線になぜ十一本もの舟入堀を掘ったのでしょうか。それは、これから述べるように伊豆地方から運ばれてきた江戸城築城用の巨石を陸揚げするためでした。

この舟入堀とは本来は「江戸前島」の海岸線であった楓川の西岸に「掘り込み」を掘って、海に浮かんだ船がその「掘り込み」の中まで曳き込めるようにしたものです。なぜそんなことが必要になったかという点、約四百年前の日本の土木技術では、海岸から遠浅の沖合にまで棧橋を作ることができなかつたからです。

たとえ棧橋という名の橋が造れたとしても、人が歩ける程度の橋ならばとにかく、後に述べるような「百人持ちの石」といった重量物が運べる強度の橋は造ることはできなかつたのです。当時は機械力というものが一切ありませんから、「百人持ちの石」の移動は文字通

り百人の人間の力が必要でした。今ですとクレーンなどを使って船から石を吊るし上げてから、陸地に下ろせば簡単に物資が陸揚げできますが、この時代ですと「百人持ちの石」は船の甲板から陸地に橋を架けて、水平に移動させる方法が唯一のものでしたのです。もちろんそのためにはいろいろな工夫が凝らされました。それぞれについては後に改めて説明します。

## ◇巨石の必要性

そもそも日本の城には石垣が付き物なのですが、この近世初期の時代になりますと銃砲戦が攻城にも野戦にも決定的な役割をするようになりました。城は大砲の攻撃に耐えられなければ、城の役割をしなくなっていたのです。

そのため約百五十年前に太田道灌によって造られた、貧弱な江戸城の作り直しは徳川幕府にとって緊急な課題だったのです。ところが砲撃戦に耐えられるような石垣用の石は、江戸の付近では得られなかつたのです。

利根川上り中流から採石した場合は丸石ばかりですし、輸送路としての利根川はすぐに洪水が起きる不安定なものでした。荒川流域の場合も同じような条件でしたし、東京湾内では鋸山（千葉県鋸南町）からの石材もありましたが、城郭用としては不適當な石だったといわれています。

そこで目を付けられたのが、旧北条氏の領地だった小田原の西部から、真鶴岬を経て伊豆半島東岸に分布する火山岩の輝石安山岩でした。現在の小田原から真鶴までの海岸道路が出来る前は、石切り場が多くあってJR根府川駅（東海道線）の名と同じ根府川石などは銘石として有名なものでした。

またこれもJR真鶴駅の近くの公民館始めその周囲には、そこが石の産地だったことを物語る遺跡や遺物がたくさん見ることが出来ます。

表紙の図の舟入堀は紅葉川を除いて、大部分は中途半端な長さに描かれています。寛永江戸図」を始め江戸初期の幾つかの都市図を丁寧に読んでみますと初めはどの舟入堀も、紅葉川と同じ様



に外濠までに掘られていて、中には丸の内(千代田区)まで通じていたことが推察できます。

それは江戸城の石垣ができるにしたがって、不要になった舟入堀を埋めて宅地にしていったからです。堀が掘られた慶長十七年から「寛永江戸図」の出来た寛永九年(一六三二)の二〇年間に当時の「通り町筋」(今の中央通り)から西側の舟入堀は、紅葉川を残してすべて埋め立てられています。そしてそれらが全部埋め立てられたのは、徳川の「江戸百年目」である元禄三(一六九〇)年のことでした。日本橋二丁目遺跡の調査は、元禄三年前まであった舟入堀の確認作業でもあったわけです。

#### ◇港湾施設と輸送路と

話を舟入堀工事の十年ほど前に遡らせますが慶長九(一六〇四)年八月に、徳川幕府としては最初の天下普請を発令した際、主に西国筋の大名(一一家)その詳細は(省略)に対して次のように命令を出しています。

①「石綱船三千艘」の建造命令と、②その船の大きさは「百人持ちの石二つ」を伊豆半島東岸から江戸海岸まで運べる規模のもの。③その輸送業務は「一ヵ月に二往復の運搬」をさせると言うものでした。

つまり西国の諸大名は造船と石の運搬を命じられたわけです。ここでとくに断っておきたいことは、「三千艘」は多数の形容ではなく、実際はそれ以上あったことが推定されています。個々の船の寸法などははっきり分かりませんが、「百人持ち」の石の大きさは、伊豆半島の東岸の石切り場だったところに、見本が置いてあったのを見た限りでは、一メートル角で長さ約二メートル前後のものでした。大型ダンプカーで一個がやると運べる程の大きさでした。

#### ◇家康の許しで実現

この舟入堀については、非常に具体的な史料が幕府の編集した『御府内備考』という資料の中にあります。題して「江戸舟入」堀工事というもので、慶長十六(一

六一)年十二月七日の項には、將軍秀忠が江戸の海岸線に舟入堀を掘る計画を発表し、その工事は中国・九州の大名に命じたことが記録されています。いわゆる天下普請の発令です。

同時に明くる十七年二月十五日に、老中(今の閣僚に当たる)の安藤対馬守を駿府(静岡県静岡市)にいる家康の所へ派遣して、図面を添えて説明させると共に、その実施の決裁を受けていることも記録されています。

それに関連して六月二日には日本橋の金座の責任者でもあった後藤庄三郎光次に、「江戸新開」の土地の町割り都市計画、今でいう「町造り」を命じています。この「江戸新開」の町の範囲は、現在の地名で言うと、南北方向には日本橋の南袂から銀座一丁目(八丁目までの「中央通り」に沿った範囲、東西方向ではこの号で取り上げるように東は楓川、西は今はない外濠の間です(その南に続く銀座一〜八丁目の範囲は次号で説明しますが、西は外濠川、東は三十間堀川、南は汐留川で三方を水路で取り囲まれた場所でした)。

ともあれ今の中央通りでいえば、日本橋の南詰めから京橋(中央通りの上を跨ぐ自動車道路)までの間に九本。そのうち海岸から丸の内まで貫通していると推定される七本の舟入堀があったのです。

この推定の根拠は図に見るよう江戸時代の初期の地図を見比べて、それぞれの町の形から割り出したものです。なお、もっと詳しくご覧になりたい場合は、京橋図書館の郷土資料室に備付けの『中央区沿革図集』(日本橋篇)・

〔京橋篇〕・〔京橋図書館刊〕を参照されることをお勧めします。さらに興味深いことに、この後藤が「町造り計画」をした範囲には、神田上水からの水道管が敷設されていて、とくに図の舟入堀の左端の外濠に沿った場所(現在の外濠通り)には京橋川を越えて、現在の銀座二丁目辺まで設置されていたことです。

これは舟入堀を巡って、神田上水の成立年代との関係と、その後貞享三(一六八六)年にできた玉川上水の給水範囲との関係を結び付ける重要な鍵になる事なのですが、とにかく「石綱船」三千艘

が伊豆に戻るための飲用水をこの「江戸新開」の町の堀端で補給できるとの配慮があったことが推察できるのです。

注 この水道管の図は『正徳上水図』（一七一―一七二五年ころ作成）東京都公文書館所蔵）と呼ばれる図に描かれているものなので

### ◇石綱船と修羅

そしてこの舟入堀を利用して丸の内まで石綱船を曳き込んで、それぞれの石垣工事現場まで石を運びました。

慶長九年の幕府の建造命令にある「石綱船」とは石を移動・運搬するときに使う綱の巻き上げ器（神楽棧かぐらせき）神楽算かぐらさんウインチのことが備えられている船のことです。この巻き上げ器は普通は地面に据え付けて、何人かの人力で綱を巻いて重い物を引っ張る道具です。

例えば漁から帰った漁船を神楽棧を使って、海から浜に引き上げるときに良く見られた道具であり風景でありました。

戦災前までは中央区内でも仕事師の（鳶職）頭のお宅の前などに、足場丸太の林場（丸太や木材を立て掛けておくスペース）の脇に分解された形で見受けられたものでした。その神楽棧を船に取り付けたところが大発明だったのです。

石は修羅という台の上ののせて運ばれました。話が飛びますが大分前のことですが藤井寺市（大阪府）から古墳時代の巨大な修羅が発見されて、話題になったことがあります。その場合は大木の幹が二つに別れた部分を選んで造られたものでした。Yの字型の股の所に運ぶ物を載せて引っ張って動かしたものです。

修羅は重いものを、それに載せることで重量が地面にかかる力を分散させる役割をします。藤井寺の場合は、大木の幹の丸みが地面との接触面積を減らす効果をもたらすという、いわば同時に相反する効果を得るものであります。修羅には実に多くの材料と形があります。目的と効果はどれも同じものです。

江戸の場合は修羅と地面の間に割り竹を敷いたり、さらにそれに

海草を挟み込んで、押し潰された海草から出るネバネバを利用して引っ張り易くしたりしました。

この運搬法の技術は、かなり広い範囲に伝えられた技術で、今でも京都の祇園祭りの山鉾が向きを変えるときに、車の轆の下に青竹の割ったものを差し込んで、それに水を掛けて滑りを良くしている場面を見ることが出来ますが、あの割り竹が修羅に相当するといえましょう。そのような工夫が至る所で見られたのです。

### ◇その後の町の移動

元禄三年までであった舟入堀の最後まで残った部分は、Aの堀跡には音羽町、Bには小松町、Cの堀跡は幕府の土地台帳ともいえる『御府内沿革図書』ではすでに延宝年中（一六七二〜一七八一）には、外濠側から楓川まですべてが広小路（防火用空地）になっていて、元禄十一年には新右衛門町という町になっていきます。この場所は前号一一号の「紅葉川の埋立」の頃で述べたように魚市場「新場」が成立した町です。Dには福嶋町

ができ、その堀筋の西端は檜物町と上楨町の会所地（共有地）になっていきます。

紅葉川の南ではFには正木町、Gには松川町、この堀筋にもCと同じく長崎町広小路になっていた場所です。ここにあった長崎町は霊巖島に移され、その跡地が防火空地だった場所でした。Hには常盤町ができました。図では？マークが付いていますが、鍛冶橋門前の堀筋の一角には幕府の絵師の狩野家が地所を拝領して、幕末まで続いています。

この時、楓川沿岸にあった材木町一〜八丁目を繋ぐ一〇の橋、つまり舟入堀の入り口に架かっていた橋もすべて取り払われて、材木町河岸の一部になりました。

今その有様を想像してみますと、首都高の江戸橋ICから京橋ランプまでの約一・四キロの間に、一直線に一〇の橋があったわけですね。ジェットコースターは大袈裟でも江戸時代の橋は小さくても小さいなりに反っていましたから、山口県岩国市にある錦帯橋を見るような光景だったでしょう。

（この項続く 鈴木 理生）